

インタビュー 人は人によって輝く

中国と日本の懸け橋として

4 大富社長 ● 張麗玲

中国人留学生たちの
闘いの日々

——フジテレビで放映された『小さな留学生』と『若者たち』を拝見しました。見終わったとき、体の中にジンと感動の残る素晴らしい番組ですね。

張 どうもありがとうございます。大変多くの方にそう言っていたいてとても嬉しく思います。

張 私は中国浙江省の生まれです。いたずらっ子で癖のある子どもでした。私の両親は文化大革命で田舎に下放されました。田舎の人たちは私たちを仲間とは思っていないんです。それで友達がいなかった。幼稚園にも行ったことがなかったですね。だから何でも一人であれこれ考えていました。

張 ちょうどそのころ、中国の改革開放政策で、普通の国民が海外に出られるようになったんです。自分の国以外の世界を見てみたいと思って、最初はアメリカに行こうと思ったんですよ、友人もいましたので。でも、親が「遠いし危ない」と言って反対したんです。「行くなら日本が近くて安全だ」と。

——番組制作については後ほど伺うことにして、お生まれや少女時代のことを少しお話いただけますか？

張 はい。そんな子ども時代を過ごしたせいか、楽しみといえば映画ぐら

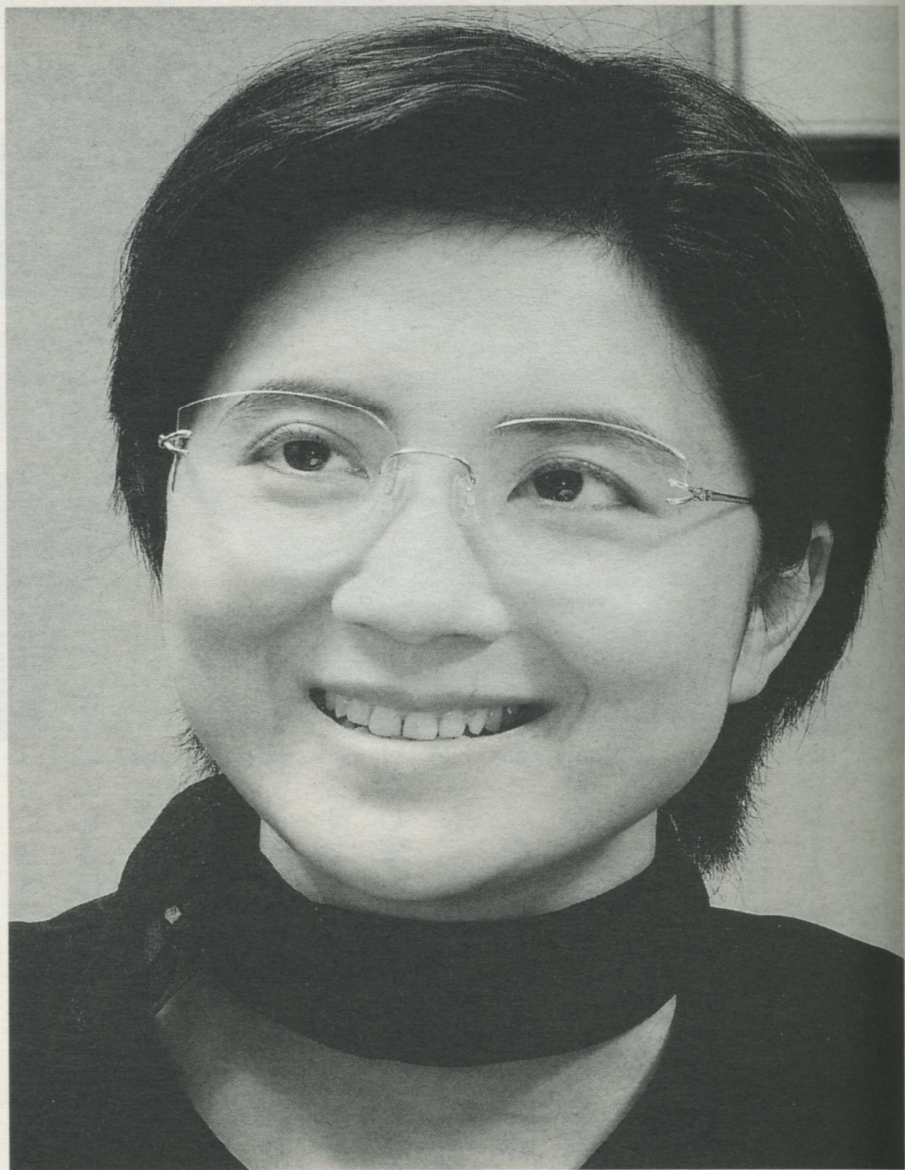
「私にカメラを貸してください。中国人留学生たちの姿を記録したいのです」——一人の中国人女性が

フジテレビに現れ、そう訴えた。張麗玲さん二十八歳。当時、大倉商事に勤める新人のOLだった。張さんは、片言の日本語も話せぬまま留学生として来日し、やがて東京学芸大学・大学院を卒業、大倉商事に勤めていた。張さんには、同時代を日本で懸命に生きている中国人留学生たちの姿を、どうしても記録に留めておきたい、という強い思いがあった。四年後、その思いは十本のドキュメンタリーとして結実。中国で放映されるや大変な反響を呼んだ。その後、日本でもそのうちの二本『小さな留学生』『若者たち』が放映され、素人が作った感動のドキュメンタリーとして話題を呼んだ。

いったい張さんを突き動かした原動力は何だったのか？ 何を表現しようとしたのか？

張 最初はどんな印象を持ちましたか？

張 日本の印象よりも、私には、私と一緒に中国から日本にやって来た留学生たちの印象のほうが強烈でした。というのも、空港で目にした彼らは、皆、人生を賭けて日本に来ていたといううただならぬ感じだったんです。



ちょう・れいれい 1967年中華人民共和国・浙江省生まれ。女優として北京で活躍した後、平成元年に来日。東京学芸大学・同大学院を卒業。7年大倉商事入社。同年12月から中国人留学生のドキュメンタリー制作を開始する。10年中国中央電視台(CCTV)の番組をCS放送スカイパーフェクTVのチャンネル「CCTV大富」で放送する大富の社長に就任。一昨年11月より10本にまとめられた中国人留学生のドキュメンタリーシリーズが中国で放映されるや大反響となる。日本でも昨年、シリーズ中の2本「小さな留学生」「若者たち」がフジテレビで放映され話題を呼んだ。

から私は、自分たち中国人留学生の姿を歴史として記録に残しておくべきだと思っただけです。改革開放時代のトップランナーたちの闘いの日々を映像に残すことに意味があると思いました。

一番辛いとき
一番幸せなとき

張さんの『若者たち』に出てくる留学生もいろいろ苦勞されますが、張さんご自身は留学生時代にどんなご

苦勞がありましたか？

張 留学生時代に一番辛かったのは、自分の心の中の葛藤です。自分はいま何のために、何をしているのかという問いがいつも心のどこかにありました。自分自身と闘っていたといえます。嫌なこともありましたが、日本もなかなか好きになれませんでしたので……。それで日本で就職することにしたんです。

——日本が好きになれないのには？

張 自分の意志で日本に来て、何年もいるのに好きになれないとしたら、自分のせいじゃないかと思っただけです。何とか好きにならないと帰れないなど。やはり、いつか自分の人生を振り返ったときに、「私は日本に行つてよかった」と言いたいですから。でも、その国の人とその国を好きにならないと、それは言えないですね。留学生の自分は学校とアルバイト先の往復だけで、普通の日本人や日本社会と接する機会が少なかったですから、就職すればそういうチャンスがきつとたくさんあるだろうと思っただけです。

——それで大倉商事に就職された。

張 私は日本、本当の日本人を知りたかったんです。それで日本の文化を勉強するにはどんな会社がいいかと考えて、商社だと。それで商社の中で一番伝統のある会社を選びました。

——大倉商事でのOL体験はいかがでしたか？

張 想像以上に厳しかったです。私は自分が一番苦手なところに配属されてしまったんです。

——確か食糧部でしたね？

張 はい。ビール原料の輸入とその契約、請求書の作成などが主な仕事で

した。でも、私はビールは飲めない。計算は苦手(自分の暗証番号も覚えられないぐらいだから)。英語が得意ない。だから、一緒に住んでいた妹に毎日、「もう辞める。こういう会社にはついていけない」と言いつづけていました。半年ぐらいでようやく慣れたんです。

——ちょうどそのころから、ドキュメンタリーの制作を始められた？

張 仕事に慣れてくると、ずっと心の中で温めていた想いが、企画として沸き上がってきました。そこで構成を考えました。成田空港に降り立つてから就職するまでを、日本語学校時代とか大学生活とかアルバイトとか、そういうテーマ別に分けると二十回シリーズになると。その企画をいろんなところに持ち込んだわけですけど、「いいたいいくらお金がかかるのかわかっているのか」と言われました。でも、私の計算ではそんなにお金がかかるはずないんだけどなあと(笑)。それに、多くの日本人にとっては「中国人留学生のドキュメンタリー」と言われてもピンとこないようでした。

——フジテレビの横山さんという方ですね、張さんのドキュメンタリーにアドバイスや支援をされたのは。